

## うつわ 本田和子

言葉は、おおむね複数の意味を持つていて、「うつわ」という語も例外ではない。それは、ものの外側を指すと同時に、中味でもあり、外と内を合わせた総体である。

例えば、食べ物などを「器に盛る」と言えば、「いれもの」を意味し、ものの外殻を指す言葉となる。一方、「リーダーの器」などと用いられる場合は、地位や役柄にふさわしい能力の意であり、人の中味を表わしている。また、時には、その能力の持ち主を指して、外と内の総体としての「人そのもの」を意味することもある。

「うつわ」という語が、人を評することばとして用いられ出したのはいつ頃からなのか、私は知らない。然し、いれのものと

しての器は、先史時代の文化を探る手がかりとされるほどに、

その歴史は古いのである。人間がその生活を整える歩みの中で、最も早く必要とされた道具の一つであったと言えよう。土器によって、人は、水や食糧を貯えたり、持ち運んだりしたのである。

「うつわ」とは、「うつろ」と同源であると言う。「うつろなるもの」と言うことであろうか。大いなる空洞を内に抱いた壺ではない。壺は、入り口が小さく、中に入るにつれてその広がりを増す洞窟である。従って、様々なものを呑みこみ、抱きとることができる。古い壺の中には小鬼や魔神も潜んでいたし、俗界とかけはなれた別天地が開けていたこともある。

内に空洞を持った器は、満たされることで多様な意味をあらわにしてみせる。水が貯えられれば「水がめ」であり、酒がしこまれれば「酒樽」となる。「うつぼ船」に乗って流れついたのが神の子であるとき、その船は聖なるのりものとなり、竹のうちの中から光り輝く乙女が見出されれば、以後、その竹は、福徳をもたらすものとなり、翁を富ませ続ける。

詩人は、人を「悲しみの器」と位置づけ、あるときは「喜びの器」と讀えた。使徒パウロは、「神の栄光を知らせるために、神によつて用意された『あわれみの器』が人である」と言う。「水は方円の器に従う」と言うように、器は内容を規定する枠としても働く。然し、土の器に過ぎない人間も、神の靈に満た

されることにより、みことばを述べ伝える「栄光の器」となり得るのである。

器と満たされることは、囲うものと囲われるもの、固定したものと流動するもの、あるいは既にそなわったものと新たに獲得されるもの、などの関係にある。幼稚園や保育所という入れものは、活力に満たされた子どもたちのいきいきしさで満たされるとき、真の「生命の躍動する場所」となる。保育者という既に固まりかけた器は、日々新たな子どもたちとの出会いによって、とりわけ、それらを包みこみ抱きとることを通じて、絶えず新しく変化し続ける。

器の輝きは、満たされるものとの相関によって生じるのだ。月に一回の誕生会にそなえて、子どもたちが紙でお菓子の入れものを作っている。保育の現場では、珍しくもない光景であろう。紙を切り、折り曲げ、貼り合わせて単純な立体を作るという、この簡単な活動も、保育者の定めたレールの上をただ走らせるのではなく、彼ら自身の試みと挑戦の場として展開されるなら、それは、子どもたちにとって一大事業であるに相違ない。彼らの幼い指は、平面から立体を、二次元の在界から三次元の凹所的空間を作り出そうとして、紙と戦う。

やがて、それぞれに彼らの器ができ上る。凹みを持った三次元の世界、それは、あらゆるものを受け入れ、抱き取り、かかえ込むために、その空な内側を外にさらして棚の上に置かれる。やがて、その日がやってきた。一かけのクッキー、一粒のキャンデーが、内側を満たすものとして容器の中に置かれた。こうして、紙で作られた凹みは、始めて「お菓子入れ」となる。子どもたちは、自分たちの手の産物が、いまここにお菓子を抱き取り、「わたしのお菓子入れ」として誕生したことによりない満足を感じる。

紙の凹みがお菓子を受け入れ、「わたしのお菓子入れ」として機能し始めるこことによって、子どもたちもまた、その凹みに受け入れられ、包みこまれる。何故なら、彼らは、自分の指の所産であるこの凹所的空間が、こうして「わたしのために」役立ってくれることで充分に報いられ、いままでは挑み戦う対象であった「ものの世界」との、和解のしるしをそこに見ているのだから。このとき、彼らにとって、この美味しい食べもので満たされた手作りの器は、「楽しさと喜びの器」である。しかもこのとき、子どもたち自身もまた、活力に満たされた「楽しさと喜びの器」となるのである。

(お茶の水女子大学)